

1878年に針ノ木峠を越え，立山登山を試みたアーネスト・サトウの日記抄 - 明治11年7月23日～28日 -

著者	佐藤 卓，朝倉 朋子
雑誌名	富山市科学博物館研究報告
号	38
ページ	133-142
発行年	2014-06-20
URL	http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&item_id=1001

資 料

1878年に針ノ木峠を越え、立山登山を試みた アーネスト・サトウの日記抄 ー明治11年7月23日～28日ー

佐藤 卓, 朝倉 朋子
富山県立新川みどり野高等学校
937-0011 富山県魚津市木下新144

The private daily of Ernest Mason Satow, who tried to climb up to Mt. Tateyama through Harinoki-touge in July 23-28 1878

Takashi Sato and Tomoko Asakura
Niikawamidorino High School, 144 Kinoshitashin,
Uozu-shi, Toyama 937-0011, Japan

アーネスト・サトウは1843年にロンドンで生まれ、文久2年(1862年)、イギリス公使館付き通訳生として来日した(萩原延寿, 2007)。幕末から明治にかけて、通算25年間、日本に駐在し、明治維新や西南戦争などを目の当たりにした外交官である。サトウは「すぐれた日本学者」になる決意をし、日本語の習得にはげんだ。努力がみのり、1865年に通訳生から通訳官に昇進、日本語を自在に駆使する外交官が誕生した(横浜開港資料館, 2001)。その後、1873年『近世史略』, 1879年『英日口語辞書』, 1881年『中部・北部日本旅行案内』, 1883年『古神道』などを発表した(横浜開港資料館, 2001)。

イギリスに帰国した後に、1921年『一外交官の見た明治維新』を刊行した(横浜開港資料館, 2001)。これらの資料は明治維新前後の日本の様子を知る大事な資料となっている。

サトウは35才の時、明治11年7月17日から8月13日まで立山と御岳を登る目的で、英国公使館のホーズと、越中と飛騨の旅を行った。その時に信州側から信越連帯新道(または越信新道、立山新道)を利用して針ノ木峠を越え、黒部川平の小屋、立山温泉、室堂に泊り、立山を目指した。しかし、雨のため立山登山をあきらめ、芦峯寺へ下山した。この間のことを詳細に日記に記している。その日記には、どこに小屋があり、どんな植物が見られたのかが記されている。しかも、多くの植物は学名で記されている。明治11年は、東京大学がようやく開校し、矢田部良吉がアメリカから帰国して植物学教授となり、標本庫を開設した翌年で、植物学雑誌(明治14年発刊)はまだ発刊されていない。そのような時代に、そこで、明治初期の針ノ木峠と立山周辺の植物がどのように理解されていたかを明らかにするために、サトウの日記を翻訳することは有意義だと考え、ここに報告することにした。

日記を翻訳するに当たり、横浜開港資料館所蔵の複製本、SATOW PAPERS: DIARIES 1861-1926 P.R.O. 30/33 (9)を用いた。なお、『富山県史資料編6近代上』(富山県, 1978)に、7月23日～27日までの日記が翻刻された英文が掲載されている。その日本語訳(福沢都茂子, 1978)は、『県史だより3』に発表されている。また、庄田元男(1992年)が「日本旅行日記1」で、サトウの日記を翻訳している。これらの先行研究を参考に、今回の日記の翻訳を試みた。

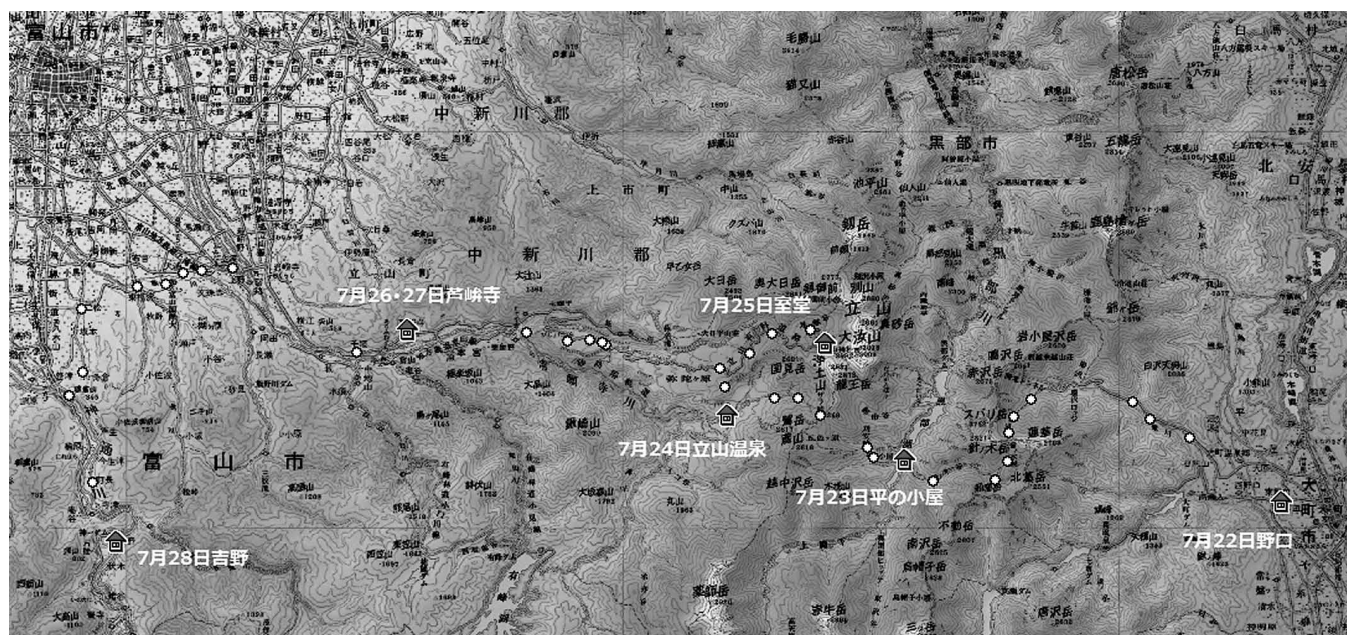


図1 アーネスト・サトウの辿ったルート

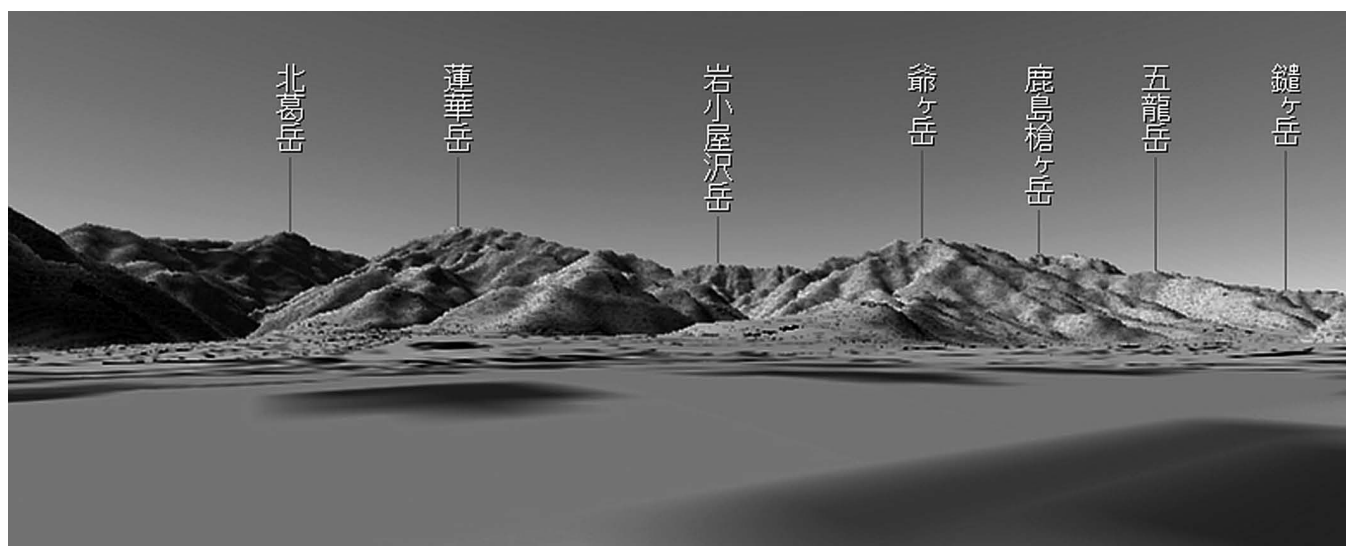


図2 大町市野口から見た西山（カシ米尔3Dカシバード使用）

翻訳文の〔 〕はサトウが注釈したものを示し、サトウの日記中の（ ）はそのまま示した。＜＞は今回の翻訳で著者が注釈した部分である。注釈が長くなる場合には、番号を付し翻訳の後に注釈をつけた。訳文の改行は著者が適宜入れた。植物の最新の学名等は米倉・梶田（2003-）によった。サトウの日記に基づいて通ったルートを、図1に示した。また、野口から見える山を、カシ米尔3Dカシバードを用いて作成し、図2に示した。

1878年（明治11年）7月23日

野口を午前5時に出発した。だんだんと雲が上がり、左から右へとヤハズガ岳^①＜北葛岳＞、蓮華岳あるいは、ゴロク岳、爺ヶ岳とツベタあるいはツメタが姿を現した。私たちが越えようとしている針ノ木峠は、蓮華岳のちょうど北＜実際は西に位置する＞にある。峠は高瀬川の左岸にある大出を通り、3つの湖から流れてくる川ではない川＜鹿島川＞を横切った。それから、木で覆われた湿地林を長い距離進んだ。山の神に敬意を表してか、木々には願掛けのための奉納物、2つの錆びた鉄の槍の穂先^②。この類いのものは、何度か見かけた。

高瀬川の谷をわかれて、私たちの目指す峠が源頭となっている加賀川^③＜箆川＞を遡上した。[非常にたくさんの *Funkia ovata*^④＜オオバギボウシ＞、*Hemerocallis flava*^⑤＜ニッコウキスゲ？＞、*Magnolia Hypoleuca*^⑥＜ホオノキ＞が見られた]。背の高いセリ科植物や12ft＜約366cm＞を超える高さのイタドリ^⑦＜オオイタドリ＞の鬱蒼とした藪を通り、白沢小屋^⑧＜荷継ぎ小屋＞へ。その小屋は、気持ちよく夜を過ごせるのだ。

ここで、川を右岸に渡らなければならなくなった。そして、道は森を通して上へと続く。まもなく私たちは急

流を再び徒渉した。[大きな *adenopfera*^⑨＜シャジン属のソバナまたはツリガネニンジン＞や黄色の *Tricyrtis*^⑩＜ホトトギス属タマガワホトトギス＞がたくさんあった]。ここで、私はたくさんの *dianthus*＜ナデシコ属＞、大きな *arenaria*＜ノミノツヅリ属＞や *hypericum*＜オトギリソウ属＞を見た。この後には、6ft＜約182cm＞を超える高さのすばらしい、花盛りの *Lilium cordifolium*^⑪＜オオウバユリ＞や別の知らない背の高いユリがあった。私たちは、それからクロイシザワと呼ばれる小屋^⑧＜丸石沢に作られた立山新道の荷継ぎ所＞に着いた。そこには、すばらしい小さな清らかな沢があった。

しばらくしてから、私たちは雪溪の下端に到着した。そして、大胆にその上を登り始めた。しばらくして、谷側に道がついているのがわかったので、私たちは登るのに専念した。そして、雪溪で道が覆い隠されるまで登った。海拔5500ft＜約1676m＞地点で、*Schizocodon Soldanelloides*＜イワカガミ＞、2種類の *vaccinium*＜スノキ属＞、*Diervilla*^⑫＜タニウツギまたはニシキウツギ＞の蕾、*Glaucidium palmatum*＜シラネアオイ＞の群落を見た。葉をつけ、曲がりくねったBirch＜ダケカンバ＞があった。私たちは、行止りと思われる地点まで雪溪を登りきり、およそ6500ft＜約1981m＞地点で昼食をとった。

この後、私たちはもう少し雪溪を歩いた。そして、私たちは尾根へと続く、雪溪の横の、とても険しい曲がりくねった道の上にいた。雪溪は、狭い溪谷を埋め尽くしていた。この道に沿って様々な新しい珍しい種 [*Stillidium japonicum*^⑬＜サトウの造語の可能性が高い＞]が見られた。そして *anemones*＜イチリンソウ属＞、*ranunculus*＜キンポウゲ属＞、*Saxifraga*＜ユキノシ

タ属>、*vaccinium* <スノキ属>などは頂上<針ノ木峠>にも見られた。

高度は約7500ft<約2286m>か8000 ft<約2438m>。雨が降りはじめた。私たちは、この地点に着くまで約10時間かかった。荷運び人夫たちのせいだ。峠<針ノ木峠>の下には、大きな黄色い*ranunculus* [*Trollius jap* <シナノキンバイ>] と黒いゆり [*Fritillaria Kamsch.* <クロユリ>] がありあまるほどだった。それから、*Rhododendron* <シャクナゲ属>や*cornus canadensis* <ゴゼンタチバナ>が咲いていた。

フタマタ<二つ俣>の最初的小屋<^⑧立山新道の荷継ぎ所>まで巨大な岩だらけの崖が頭上にあった。それから、峡谷側は傾斜がきつくなり、その崖は大方灌木に覆われていた。氷のような冷たい水が、灰色の花崗岩の上を溢れ流れている。1つの橋を渡るとき、とても寒く感じた。私たちは、温度の変化を感じた。

19時に私たちは黒部<黒部川本流>に着いた。そして、槍ヶ岳の左側から来るのかと思われる川を渡った。とても不安定な橋を渡り、とても清潔で新しい作りかけの小屋<^⑧立山新道の荷継ぎ所>に着いた。

彼らは、道程<^⑧信越連帯新道あるいは越信新道、立山新道>はほんの15マイル<約24Km>しかないと言った。しかし、比較的短い距離の道を作るのに、膨大な時間を費やすことはあり得ないことだと思われた。そして、道の管理者が、私たち旅人をギョッとさせないため、わざわざ、必要な時間と距離を実際より少なめ目に言ったのだ。その道の名前は、黒部側にたくさんあるミヤマハンノキからその名をとっている。私たちの荷運び人夫は、蓮華岳の頂上に育つ貴重な草<^⑩>のことを話した。その草は、人々の生死を占うために使われる。もしそれを水に入れて開けば、その人は生き、もしそれが閉じれば、死ぬというのだ。黒部は急流のそばにある古びたブナ木立の中のとてもロマンチックな場所に位置しており、高い木が覆う丘に囲まれていて、その地域の最も稀な辺境の地だ。

7月24日

昨夜、私たちは、夕食にイワナと呼ばれるうまい魚を食べた。そのイワナは、雄鶏の羽製の毛針を使い黒部川で獲ったもので、約3/4ポンド（約340g）だった。

5時50分に、主にブナとトチノキ、少しの*Far* <オオシラビソ>の深い森を抜け、ヌクイ谷と呼ばれる谷の北側の尾根へ続くジグザグの道を登り始めた。

小屋を出て40分後、振り返ると、私はとてもはっきりとしたV字型の切れ込みを持つピラミッド型のピークを見た。おそらくヤハズガ岳だろう。前方、ヌクイ谷の上部には、その左側に部分的に雪や緑がところどころある

平らな尾根があり、私は、私たちはこれを超えるのだと思ったが、その推測は違っていた。わらじをはいて歩いた。7時に黒部峡谷を取り囲む、後ろの後立山と呼ばれる、そびえ立つピークなどの山々は申し分ない眺めであった。稜線の頂まで1時間7分。左に、深い峡谷の向こうの越中の方を見る。カリヤス峠と呼ばれる険しいとがった岩の多い頂上に目を向けた。見たところ、あまりに近いので人は容易に飛び越えて行けるかもしれない。

登ってきたところを見ると、黒部峡谷から東に向かって繋がっている長い山脈が見えた。山並みはハイマツの濃い緑色とミヤマハンノキの薄い緑色の中に、雪が筋状、あるいは斑点状に見えた。北東を見ながら、2～3歩降りると、私たちはとても高いピークを見た。それはもちろん、私たちはすぐに立山だと思ったが、間違っていた。谷<中ノ谷>へ降り、沢を渡渉し、ジグザグの道に沿って、谷の源流へ登る。上流では、時々その峡谷を埋め尽くす雪渓を横切った。*moutain-ash* <^⑮ナナカマド>、赤い干しぶどうのような実をつける*ribes* <^⑯コマガタケスグリ>、白と紫の*Enkianthus* <サラサドウダンの仲間>、黄花の*hemerocallis* <ニッコウキスゲ>、栗色の実をつける*rubus* <キイチゴ>（ブルーベリー）、黄色いスミレ、*Glaucidium palmatum* <シラネアオイ>、大きな黄色い*ranunculus* [*Trollius Japonica.* <シナノキンバイ>]、小さい黄色の*ranunculus* <^⑰ミヤマキンボウゲ?>、白色の*ranunculus* <不明>、大量の*arums* <ミズバショウ?>を見た。

山頂<ザラ峠>に9時45分に着いた。（高度 ）。振り返ると、針ノ木峠を私たちの上に見る。越中の平野部とカーブしている能登の青い丘、それらを分ける青い海、その地域をまっすぐ横切って流れる神通川の白い筋。もう一方の側は荒涼として、起伏の多い丘陵で、主としてハイマツ（フジマツ<カラマツ>）とミヤマハンノキに覆われている。私たちが下ることになっている谷は、北側は、火山形態の断崖で囲まれていて、角張った石の険しい斜面になっている。黄色っぽい斑点のある*gentian* (?) [*nikoensis*] <^⑱トウヤクリンドウ>が峠に広く見られた。

険しいジグザグの道が、沢の水の流れるところまでまっすぐ続く。特別な植生は見当たらない。左岸へ渡り、また再び右岸へ。しばらくすると岸側の丸い池から水蒸気が上がっているのを見た。そして、水は谷へと溢れ出ている。私たちは橋を何回も渡り、すねをぶつけながら、足がかりの無い道を登る。ゆるやかに傾斜する斜面に、真ん中で泡立つ緑がかかった青色の水、硫黄臭の蒸気を発する直径40ヤード（約37m）の池<^⑲新湯>があった。指先で触れると、慌ててひっこめるほど熱い。2人の男

がその池の端で、水に堆積した硫黄の花を探した。宿の主人く立山温泉の深見六郎>は「これは1858年2月25日起きた安政の大地震まで、全くの真水の池だった」と言う。急なジグザグ道を谷の下方の砂地へ下った。その谷は、時々、左方の崖から水が溢れていた。そして、1/4マイル<約400m>ほどで、「有峰」として知られる、深見六郎が経営する温泉に着いた。また温泉は「立山下くりゅうざんした>の温泉」と呼ぶ。立山くりゅうざん>はすなわち立山くたてやま>のことである。

その温泉は川の反対側にあり、華氏124°<約51℃>の1つの源泉から供給され、流出量が多い。入浴するために、冷たい水を混合している。それはまた、熱いままでも、冷たくしても飲むが、特に味は無い。周囲は非常に自然が豊かで、谷を見上げると立山（りゅうざん）タテヤマ、浄土山が絶壁で繋がっており、その右方は尾根で隠れている「ざらごし」、現在は「ちくさ峠」と再命名されている。右は巨大な石の塊がごろごろする、ざらざらした平原だ。それらの石は、その後ろの「とんび山」から大地震が起きたとき落下したのだ。その大地震の時、その山の大部分が右側に崩れ落ちて流れをせき止めた。1ヶ月後、雪が溶け、雪解け水がせき止めたところから溢れ出て、下流の村に土砂洪水が押し寄せた。

注目に値しない滝が崖のあちこちで流れる。土壌はとてもやせており、気候もあまりに厳しいので作物が育たない。下生えや耐寒性のある植物がまばらに生えている。コケやモウセンゴケが湿った場所に生えている。宿の主人く深見六郎>が平家の落ち武者である有峰の村民について話した。彼らは村の中で結婚し、家は11世帯しかないが、1世帯には3～4家族が住んでいる。そしていかなるお金も必要が無い。容貌はお互いよく似ている。よくわからない²⁰。有峰までは湯川と真川が合流するところから7.5里、あるいは上滝から8里。

先に述べた孫池¹⁹水蒸気が上がっている丸い池<現在、新湯と呼ばれる>のそばに*Parunassia palustris* <ウメバチソウ>が咲いている。mmebach-soは正式名称だ。

7月25日

6時15分に出発。朝の天候は今にも崩れそうだった。ザラ越えの右は鷲岳、ニゴシ谷、湯谷、鷲山、そしてカワノクラ。右側の断崖は松尾と呼ばれている。我々は崩れやすい鋭い岩からなる急な沢を登った。背の高い湿性植物の間を登って、見えていた平坦地にたどり着いた。そこから私たちは、前方に赤い絶壁を見た。浄土山の左側は天狗平だ。ササ藪²¹を通り過ぎた後、左へ方向転換し、別の不安定な石の沢と、切り立った岩壁を登る。そして、左の低木の茂みの中へ分け入り、滑りやすい地面を草の株を掴み、自らの身体を支えながら登った。ガイ

ドのホンゴウ<現在の大町市常盤本郷か>のキンペー<庄田元男（1992）訳では金兵衛>は、岩壁を登るためのロープを持ってきたが、私たちは、そのロープなしで登った。私たちの人夫と2人の巡礼者がそのロープを使った。雨が降り始めた。そして再び沢の中を歩いた。ここでは、アンテロープのような顔をしたカモシカは、クラジシと呼ばれる。なぜなら、それは岩の穴（クラ）に棲むからだ。方言で「や」は「はい」、「だいた」は「だした」、「し」は「ひ」、「ぶと」は「ぶゆ」だ。

室堂への道がある所まで2時間半かかった。それから、私たちはササ藪を登り降りした。水量が多い岩だらけの沢を下り、湿った草付き斜面を越えた。雨が激しくなった。そして全く何も見えなくなった。

2つの道<松尾峠からの道とブナ坂からの道>の交差する所を過ぎて、約1マイルの所に、小さな哀れな小屋<鏡石の避難小屋（吉沢、1927）>が見えた。私たちはそこで昼食をとるため、びしょ濡れのまま這って入った。ガイドはナナカマド²²を「クマザンショ」と呼んだ。さらに2時間以上沢を登り続け、石の多い湿原を横切って歩いた。12時50分前に小屋<室堂>に着いたが、荷物はおよそ1時間遅れた。

16時半過ぎに雨が止み、雲が少し上がったので、小屋から北方、200ft<約61m>下の巨大な窪地にある、硫黄孔を訪ねることができた。そこには、円形の穴がいっぱいあり、最大のものは直径20ft<約610cm>もあった。それらの穴は沸騰しており、泡立つ熱いお湯で、液状の泥と硫黄を含んでいた。その1つは直径約15ft<約4.6m>あり、液状の泥と硫黄を吐き出し、空気中に飛び散らしていた。それはまるで、地球の深い亀裂の端からもたらされたものが消滅してしまうことに苛立っているかのようであった。そして、それら全体が、（地球の）循環の中で起きている終わりの無い動きの結果なのであった。別の黒い泥の噴出孔は、滑稽にもまるで万物を引っ張る力<重力>に対抗するかのようには思われたが、それが果たされることはなく、常に元の穴にまた戻っていくのであった。深い穴や狭い割れ目から吹き出す蒸気の音は、耳をつんざくようだった。噴出孔の最高温度は、華氏190度<87℃>又は188度<86℃>で、硫黄の噴出孔は華氏160度<71℃>だ。噴出孔の端から流れ込んでいる小川の温度はたった華氏42度だった。大小の噴出孔全てを数えるのは不可能だろう。直径2in<約5cm>から大きいものまであり、噴気孔の数を数えることは不可能だと思われる。実際のところ噴気孔の位置は時間とともに変化し、時には完全になくなってしまうのだ。

巡礼者用の小屋<室堂>は、木造で、とても風通しがよい。マツ材を燃やして暖をとっているが、その煙が目

にしみた。寝具は無く、陶器類や他の用具もほとんど無い。水と飯だけが食料だった。7月20日から9月8日までの50日間で、巡礼者は入山可能だ。今年はすでに、100人が登った。ここから富山平野のすばらしい景色が見えた。浄土山への道は右へ、主峰の権現堂への道はまっすぐいく。別山と名付けられた3番目のピークがある。

小さい青い*Campanula*²²＜ホタルブクロ属イワギキョウ＞、白い*anemone*²³＜ハクサンイチゲ＞、*saxifraga*＜ユキノシタ属＞、*schizocodon*＜イワカガミ＞と黄色いキク科植物 [*arnica*＜ウサギギク＞]が多い。白い花と輝く丸い葉をもつ小さな植物²⁴＜コケモモ＞が、温泉から登って来た道の至る所にある。それは小屋まで続いている。

7月26日

朝起きたら、ひどい雨で、雨の備をした。当然山は何も見えず、私たちはあきらめた。小屋の煙は、あまりにも目にしみ、さらにもう24時間いるのは、どんなに悪天候が続いたとしても不可能だろう。

私たちは、7時45分に、登る時に通った道を下った。1時間で道の右にある直立した平らな大きな岩で、下部に像がある鏡石へ。さらに45分で、姥石と呼ばれるもうひとつの目印目標へ。姥石には傾いた右手側の面に独特な凹凸がある。姥石は、道の途中にある大きな石がゴロゴロする沢の1つの真ん中にある。その小屋へは9時45分に着いた。そして1時間10分後、立山温泉との分かれ道にある小屋＜追分小屋＞に着いた。雨はしばらくの間止んだ。我々は比較的鮮明に富山平野を見た。白色の小さな*azalea*²⁵＜オオコメツツジ＞、ラン、そしてセイタカアワダチソウに似ている黄色い花を付け、葉はアイリスのような植物²⁶＜キンコウカ＞。11時55分まで休憩した。

それから直径12ft＜約366cm＞の巨大なスギの自然林を抜け、道は雪融け水でぬかるみ、丸太が浮き沈みしていた。絶えず木の根を踏んで歩いた。黄色でつるつるして滑りやすい泥の上を歩いた。山の肩を桑谷平と呼ぶ。小屋²⁷はブナ平と呼ばれる林と桑谷平の間の小さな谷に立っていた。ブナ平は、主として高いブナに覆われているが、他には、スギやクリやトチノキがある。称名滝と呼ばれる滝が、地獄から流れている川にある。ブナ坂の上にある小屋に14時40分に着いた。急な下りの後は少しゆるやかになる。雨は後2時間降り続き、そしてやんだ。材木坂*に15時45分に着いた。材木坂は、私たちが下ってきた尾根に川から最初にとりつく場所だ。靴下とサンダルを履き替える。とても険しい下り。右側は地獄からの流れと断崖、左側は常願寺川の谷。2つの谷は高木に覆われた急な丘陵に挟まれている。いろいろな長さの五角柱の玄武岩が道にごろごろしている。

川原に16時40分（35分で）に到着。17時5分に荷物を、前もって送り、ホーズ²⁸を待った。腿の真ん中の高さまである流れの中を歩き、川の中央にある大きな溶岩の塊にたどり着いた。そこから荒れ狂う急流の上の一本橋を渡る。ここからの道は、相当な高さで広い川床の右岸に沿っており、曲がりくねっていた。スギの木立の中にある芦峠へ進む。

私たちは、神社の神主の家に宿った。彼は神仏習合の頃、仏教徒だったが、その後、封土を守るため、神道を信じるようになった。彼は私たちを酒でもてなした。そして何年前か、ディロンとガウランド²⁹がイギリスの首都ドンドル＜ロンドン＞の話をしていたということをつくさん話した。彼は、私たちに有峰に行かないように助言した。温泉の主人が話したことが確認された。ここから、ミズシマ＜水須＞へは3里、それからさらに8里、家の無い所を登る。コメや他の食料が必要だ。住民たちは稗のみを食べ、スープは塩と水だけだ。12～13軒の家しか無く、それぞれには3～4家族が暮らしている。彼らは、近親結婚をしているが、他の人と体格的にも知的にも劣ってはいない。彼らは疑うまでもなく、平家落人の子孫である。彼らの言葉も、普通の日本語と異なり、慣れないと理解できない。人々の名前は古くさい。

*寺の建立者によって伐採された材木を跨いだ女がこの石にかえられてしまったという言い伝え。

7月27日

芦峠のOkaminojinja＜雄山神社＞の祠掌であるSaeki Masanori³⁰＜佐伯正範＞の家で、1日休んだ。Okaminojinjaは最初に立山に登った佐伯有頼により701年に建立された。彼（佐伯有頼）の墓は、祈願殿の裏³¹に有り、およそ3ft＜約91cm＞の高さで、そこには、常緑のshirarake³²＜ヒサカキ＞が植えられていて、不規則な形の石で囲まれていた。およそ8ft＜約244cm＞平方だ。すばらしいスギの古木林がある。文武天皇を祀った大宮と手力尾神を祀った若宮がある。有頼の父は、この辺り一帯の国司で、鷹狩りが大好きだった。有頼の父が役所にいない時、有頼は、もし失えば家に戻らないという約束で、養母から鷹を借りた。そして彼は、ここから北へ25マイル＜約40km＞の「かじかの」へ鷹狩りに行き、鷹を逃がしてしまった。その鷹を彼は、現在の岩峠寺まで追いかけた。ここで、熊が現れ、鷹はそれを見て怖がり、熊の方は逃げようとしなかった。有頼は熊めかけて、矢を放った。2つの動物は川の上流へ逃げ去った。彼はそれらを追い、山まで来た。そこが室堂の反対側の洞穴³³＜玉殿＞だった。そこで彼は、2つの動物が不動明王と阿弥陀如来に姿を変えているのを見た。そこで、彼はその地に3年3ヶ月留まり寺を建立した。彼の家来

たちは皆、佐伯姓だ。芦峠寺には11軒有り、岩峠寺には37軒ある。かつて建物は統治者の費用で建てられた上に、各寺に50俵、各家に13俵が与えられた。これらの手当^{②4}は現在の政府によって中止された。絵のようにとても美しい村で、竹林やスギ、モクレン、クリで覆われている。家々の屋根は板ぶきや藁葺きだ。ツツジや大きなオトギリソウが家の裏庭で花をつけている。

7月28日

夜が明けるや否や、蟬たちがいつものように騒ぎ始めた。私達は5時20分に出発し、常願寺川の谷を歩いた。シナキ<千垣>と呼ばれる小さい村を通して岩峠寺まで。そこでは、私達の芦峠寺の世話人が江戸へ出した手紙を依頼した富山へ降りる使いを使って、彼は短い書き付けを送ってくれていた。おかげで立山の世襲の宮司であるSaeki Keiji^{②5}<佐伯敬治>の家には私達のための朝食が用意してあった。

芦峠寺からおよそ1マイル(約1.6km)下ったところで、橋を渡って川を横切ることができた。その橋からミズシ<水須>への道があり、そこから有峰までは8里。私達の人夫達には上滝の近くの川でイワナを釣るための竹竿と毛針が与えられていた。ゆで卵と、薄く切ったゴマを振りかけたキュウリが私達の世話人が私達に用意した全てだった。このあたりの川床は広く、3つか4つの流れに分かれていた。

私達は2, 3時間歩いた。最も川が深い所では船を使い、瞬きする間くらいの短い時間で渡り、4回に1回は狭い板で渡った。こうして私達は見事に建設された大きな石の堤に着いた。その堤は洪水時の川の猛猛な破壊力から上滝の村を護るのだ。この地の家々の前に大きな土間があり、たいてい正面には石灰竈があった。

この村を後にしての行路は水田が広がる谷を下り、私達は能登の低い丘陵や富山の海岸の木々を見た。花崎、カミウラ<上大浦>、東黒牧、そして福沢を通った。道は徐々に左へ曲がり、砂地で松に覆われた尾根の端を横切り、再び水田を通り、二本松^{②6}<二松>へと続いた。この寒村は富山から高山までの主要道路上にあり、先ほどの場所からほんの3里だ。カミウラ<上大浦>には、真成寺<“真成寺”>と漢字で表記されていると呼ばれる寺がある。気持ちの良い部屋があり、庭園には小さな小川が流れており、人が快適に夜を過ごすことができるだろう。私達はそこで、荷物が届くまでの間お茶を飲んだ。荷物が届かなかったので、私達は旅を続けなくてはならなかった。何のお返しもできないことを、寺の住職に謝った。13時に二本松に着いたら、私達の荷物が届いていた。そして私達の怠慢に許しを請う手紙と共にいくらのお金を真成寺の友人に送った。日陰の温度計は華

氏90度(32.2℃)を示した。

昼食後、14時に再び出発した。神通川右岸に到着するまで、広くて時に石や砂の多い道を、にわか雨が降る中を歩いた。道の反対側は笹津。そこは平野に続く丘陵の端に位置する。

私達は、25の村々の集まりの総称であるフネノクラ<舟倉>と呼ばれる所で、2, 3分休憩した。それから、牛ヶ増や町長の村々を通った。岩の多い土手の間の濃い緑色の川が流れる美しい曲がりくねった谷がある。とうもろこしや稲田が広がり、小さな集落が点在する斜面、その上には再び、樹木の鬱蒼と生い茂った丘だ。町長では、その用水^{②7}<舟倉用水>が狭い峡谷から緩やかな曲線を作っていた。道は用水の堤の上にあり、用水は幅3ft(91cm)、深さ3ft(91cm)で、高い水準の造作であった。そしてその用水は、薄波の谷から端を発し、吉野と町長の間から流れているのだ。それは70年前に完成し、谷に沿った用水の水は舟倉に達する。実際のところ私達は牛ヶ増を通り過ぎてからそれに気づいたのだ。この道はウイアマラに似ている。<以後も日記は続くが、参照した原文資料は薄くて判読できなかったので、翻訳はここまでとする>

注釈

①長沢(1972)は、矢筈岳は船窪岳の別名として記載している。しかし、大町市史編纂委員会(1984c)は、サトウの日記の翻訳として「ヤハズヶ岳(注北葛岳のことか)」と記している。矢筈岳がサトウの記したヤハズガ岳と同じであるならば、船窪岳は野口からは蓮華岳に隠れて見えないので、ヤハズガタケ=船窪岳とすることは適当ではないと考えられる。図2に示したように、野口からは、蓮華岳の左に北葛岳が際立って見えることから、後者の説を支持し、サトウが記載したヤハズガタケは北葛岳であると推定した。

②長野県教育委員会編(1979)は、山の神に捧げられるものとして錆びた槍の穂先のようなものを写真で示している。大町市史編纂委員会(1986)は山の神の祠には、剣型を上げる風習があるとしている。大出の山の神を祀る祠近くには、山内安全を祈願し、剣を模した金属片が貼り付けられた屋形型の板がアカマツの幹に貼り付けられていた。また、日向山の山の神の祠には2本のスギの間にしめ縄が張られていた。このような様子をサトウが見たと考えられる。

③大町市史編纂委員会(1985a)は、笹川は加賀川と呼ばれていたことを記している。

④*Funkia ovata*は、松村任三編(1905)のp199に、*Hosta coerulea* ギボウシの異名として記載されている。長野県

植物誌編纂委員会編 (1997) のp1418では、オオバギボウシ (*Hosta sieboldiana*) が分布していることを記載している。現在、箆川沿いにはオオバギボウシが分布している (中村ら, 1959) ことから、サトウが記録した植物はオオバギボウシだと推定される。

⑤*Hemerocallis flava* は、松村任三編 (1905) のp197に記載され、ワスレグサとカンゾウという和名が示されている。明治の初期にはリンネが記載した*Hemerocallis flava* と*H. fulva* がワスレグサ属の植物として認識されていたと考えられる。箆川沿いに分布するワスレグサ属の植物は、ニッコウキスゲとノカンゾウが報告されている (中村ら, 1959) ことから、サトウが見たワスレグサ属の植物はニッコウキスゲの可能性が高いと考えた。

⑥*Magnolia Hypoleuca* は、松村任三編 (1912) のp94に記載されている*Magnolia hypoleuca*, 和名ホオノキとあるので、サトウが見た植物はホオノキであると考えた。

⑦12ft<約366cm>を超える高さのイタダリの仲間は、オオイタドリしかないこと、箆川沿いにオオイタドリが分布する (中村ら, 1959) ことから、サトウが見た植物はオオイタドリと考えた。

⑧立山町 (1984) のp572に「越信新道」の見取り図 (開通社発行) が掲載されている。その図中に山の神、白沢、丸石沢、針ノ木峠、二つ俣、中小屋、黒部の名前がある。大町市史編纂委員会編 (1985b) のp651には信越連帯新道の断面図が示され、そこには野口、山の神、針ノ木峠、平の小屋黒部、ザラ峠、立山温泉、原の名前が出ている。黒部川を渡ったところには平の小屋があった。そこが立山新道の黒部川横断地点に設けられた荷継小屋で、サトウが宿泊したときは完成間近の小屋だったと考えられる。間取りは大山の歴史編集委員会 (1990) のp551に掲載されている。

⑨*adenophera* はシャジン属植物と考えられ、箆川に分布する大きい (背の高い) シャジン属植物はツリガネニンジンもしくはソバナと考えられる。

⑩黄色の*Tricyrtis* は、松村任三編 (1905) のp215-216に記載されている*Tricyrtis* 属の中で、黄花の植物は*T. flava* キバナノホトトギスと*T. latifolia* タマガワホトトギスである。この中で箆川沿いに分布するホトトギス属はタマガワホトトギス (中村ら, 1959) なので、サトウが見た植物はタマガワホトトギスであると考えた。

⑪*Lilium cordifolium* は松村任三編 (1905) のp202にウバユリの学名として記載されている。箆川沿いにはウバユリの変種であるオオウバユリが分布する (中村ら, 1959) ので、サトウが記載した植物はオオウバユリであると考えた。

⑫富山県史編纂委員会 (1978) の翻刻では*Dienilla* とな

ているが、日記原文では*Diervilla* と読み、松村任三編 (1912) のp597にタニウツギ属の学名として使われていたので、箆川流域にはタニウツギまたはニシキウツギが分布する (大町市史編纂委員会, 1984a) ので、この2種のいずれかを指すものと考えた。

⑬*Stillidium japonicum* という植物の学名を文献で参照できない。*Still-*で始まる学名は*Stillingia japonica* でこれはシラキを指す。シラキの長野県における自生地は中部と南部の1500m以下である (長野県植物誌編纂委員会, 1997) ので、適当ではないと考えた。サトウが参照していた文献はThunbergの『Flora Japonica』(1784) やSiebold & Zuccariniの『Florae Japonicae』(1835-1870) などの著作物が考えられる。それらの中でSt-で始まり、高山に分布する植物の学名を調べてみると、*Stellaria* (ハコベ属) があり、サトウは日記を書く時に*Stellaria* を*Stillidium* と書いてしまったのではないかと推定される。その場合には針ノ木岳周辺に多く見られるイワツメクサが候補となる。

⑭蓮華岳の山頂に生える植物を使った生命占いを紹介する文献は、大町市史編纂委員会編 (1984c, 1984b) や長野県教育委員会編 (1979)、信濃の民話編集委員会 (1958) には見当たらなかった。蓮華岳で特筆すべき高山植物の1つにコマクサがある。後ろ立山連峰では雪倉岳から白馬岳などに大きな群落を作っている。また、四谷龍胤 (1980) は『ある登山家の半生』の中で、大正8年8月初旬「針ノ木峠にコマクサが咲き乱れていた」と記録している。サトウが針ノ木峠を越えたときも、コマクサが針ノ木峠で目についたと思われる。コマクサに関する民話には「御嶽山のコマクサ (病気の娘を治すために御嶽山へ、金銀に輝く葉を持ち、美しい桃色の花を咲かせる小草を、おこまという母親が取りに行き、それを娘に飲ませたところたちどころに病が治ったという。以来その小草をオコマグサといい、いつしかコマクサになったという)」がある (池原昭治, 1993)。このコマクサを針ノ木峠で見て、ガイドが草を使って、命の長短を占う話をしたのではないかと想像してみるが、確証がない。

⑮mountain-ashのashは一般にモクセイ科トネリコ属の植物を指すが、『カレッジライトハウス英和辞典』では「ナナカマド」という訳を載せている。トネリコとナナカマドはいずれも複葉を持つ樹木である。

⑯赤い干しぶどうのような実をつけるribesは、『松村任三編 (1912) のp186に記載されている*Ribes japonicum*, 和名コマガタケスグリと考えられる。

⑰小さい黄色の*ranunculus* は、松村任三編 (1912) のp119に記載されている*Ranunculus acer* var. *stevani*, 和名ミヤマキンポウゲと考えられる。

⑮gentian [nikoensis] は *Gentiana nikoensis* と考えられ、松村任三編 (1912) のp499にトウヤクリンドウの学名の異名としてあげられている。明治の初期にはこの名前が使われていたことを示す。現在は *Gentiana algida* Pall. が使われている。

⑯硫黄臭の蒸気を発する直径40ヤード (約37m) の池は、現在の「新湯」と考えられ、後から出てくる「孫池」と同じ。「新湯」は吉沢 (1923) が記載している。

⑰本文は有峰の住民の説明の後、セミコロンでつないで understanding limited 書いている。この部分の訳は訳者によって異なっている。庄田元男 (1992) のp84では「知力に限りがある」、萩原延寿 (2008) のp376では「知力は劣っている」となっている。しかし、後日、2回有峰のことを聞き、有峰の人は「知能的にも劣ってはいない」、「他の日本人と違うところはない」ということを聞いている。このことも含めて understanding limited を「よくわからない」と訳した。

⑱canebrake は一般に籐の茂みを指すが、立山には籐は分布していない。ササは籐と同様に節を作る単子葉植物なので、この言葉を用いたと考えられるので、ここではササ藪とした。

⑲小さい青い *Campanula* は松村任三編 (1912) のp615に記載されている *Campanula dasyantha* チシマギキョウ、または *C. lasiocarpa* イワギキョウのいずれかと考えられるが、室堂周辺で観察していることからイワギキョウの可能性が最も高いと考えられる。

⑳松村任三編 (1912) のp104に、高山に分布する白い花をつけるイチリンソウ属植物として *Anemone narcissiflora* ハクサンイチゲと *A. debilis* ヒメイチゲが記載されている。両種ともに立山に分布するが、ヒメイチゲは草丈が低く、あまり目立たないこと、「たくさん見られた」と表現できるほど大きな群落を作らないことから、サトウの見た植物はハクサンイチゲと推定した。

㉑白い花と輝く丸い葉をもつ小さな植物はコメバツガザクラやコケモモ、イワウメなどが考えられるが、立山温泉から室堂まで至る所に見られる植物はコケモモなので、サトウの見た植物はコケモモと推定した。

㉒azalea は一般にタイワンツツジから作られたツツジ類の園芸品種群を指す。サトウは大型で花序を作るシャクナゲ類に *Rhododendron* を使っていることから、立山で白色の花をつける azalea はオオコメツツジ (*Rhododendron tschonoskii* subsp. *trinerve*) と考えられる。

㉓goldenrod はセイタカアワダチソウで、北米原産の黄色の花をつけるキク科植物を指す。この植物の仲間は、ミヤマアキノキリンソウが立山に自生する。アヤメのような細い葉を持ち、ミヤマアキノキリンソウのような黄

色の花卉を持つ植物は、ミヤマアキノキリンソウの頭花とキンコウカの1個の花のイメージが似ていること、両種の花序が似ていることから、サトウの記載した植物はユリ科のキンコウカと考えられる。キンコウカは弥陀ヶ原に多く見られる。

㉔ブナ平と桑谷の間にあった小屋は、明治41年に発刊された大井冷光 (1908) のp. 81に「数年前まで山毛櫨の巨木、樹ち井びて、晝尚ほ暗き森林なりしも、今は伐截せられて、昔日の面影を止めず、但し其の名は今も山毛櫨平なり、緑蔭に女茶屋ありて湯水及び干物を売れり、」とある茶屋のことと思われる。サトウが通った頃、ブナ平は鬱蒼としてブナ林であったが、明治の終わり頃にはブナが伐採されていたことがわかる。

㉕ホーズ (Lieutenant Hawes) はイギリス公使館付き武官で、サトウと共編で横浜ケリー商会から1881年に『Handbook for Travelers in Central & Northern Japan』(中部・北部日本旅行案内)を出版した(横浜開港資料館, 2001)。この本の中で、針ノ木峠越のことなどが記載されている。

㉖ディロンとガウランドについては、吉田光邦 (1968) のpp. 156-181、高瀬重雄 (1981) のpp. 353~365に詳しく記述されている。ディロン (Edward Dillon) は大阪造幣寮および大蔵省造幣局のお雇い外異国人 (イギリス人) で、明治6年3月に来日し、明治11年1月に満期解約。ガウランド (William Gowland) は大阪造幣寮の化学と冶金の技師として招聘されたイギリス人で、明治5年10月から明治21年まで在日した。

㉗Saeki Masanori は佐伯正範であろうと、高瀬重雄 (1981) はp. 358に述べている。立山町 (1977) のp. 875に、佐伯正範は雄山神社の祠掌の一人として出てくる。また、明治4年に廃藩置県となり藩からの神供米や給禄が断たれたこと、雄山神社の祠掌に任ぜられたものはわずか5名に過ぎないことが同文献に記されている。

㉘現在の祈願殿は開山廟所の後ろにあるが、明治の初期の芦峯寺の様子を示す図 (佐伯喜代男, 2001のp19.) には雄山神社祈願殿の後ろに立山元祖霊社が描かれている。同様に立山町 (1977) のp. 744の芦峯寺諸堂配置図には立山開山廟所が御普請所講堂の斜め後ろに描かれている。

㉙明治の初期の芦峯寺の様子を示す図 (佐伯喜代男, 2001) の立山元祖霊社の石垣状の上に1本の木が描かれている。この木がサトウのいう常緑樹の“shirarake”であろうと思われる。しかし、シララケという樹木の方名は、高木知恵編 (2009) の『最古の富山県方言集』には採録されていない。また、日本の植物方言を集録した八坂書房編 (2001) の『日本植物方言集成』にも「しららけ」は採録されていない。しかし、宇奈月町教育委員会 (1987)

の『宇奈月の方言』では、ヒサカキはシラカケで、4音の内3音が同じ、小原修三(1992)の『八尾の方言』では、ヒサカキはシャカケとなっている。また、芦峯寺で2人の住人にヒサカキの枝を示して、地方名を聞いたところ、“シラカケ”という返答をえた。図には針葉樹と異なり、葉は一枚一枚を小さく描かれていることから常緑広葉樹と考えられる。樹形が半球状で、幹が直立している性質はヒサカキと一致しているので、サトウが記録したシララケはヒサカキではないかと考えられる。

③室堂の東側の崖にある洞窟で、玉殿と呼ばれている。

④立山町(1977)のpp.873-874に、「明治2年9月には藩からの給禄百俵が五拾俵となり、(中略)玄米拾参俵あてを、東西の六十二社人に下付し、」とあることと一致している。そして、「明治4年に廃藩置県となって、藩からの神供米や給禄が断たれると、…」という記述とも一致している。

⑤Saeki Keijiは立山町(1977)のp.875に、雄山神社の祠掌の名前として佐伯敬治が出てくるので、この名称を用いた。庄田元男(1992)は佐伯慶治としているが、この名前は今のところ、『立山町史上』、『立山町史下』(立山町, 1984)には見当たらない。

⑥二本松は現在、地形図では二松という地名が使われている。

⑦舟倉用水は新川郡舟倉野の開拓を目的として掘削された用水で、1816年に完成し、307haを灌漑した(橋本友美, 1994)。サトウが見たのは1878年なので、日記の70年前に完成したという記述はほぼ正しい。

謝辞

この研究を進めるにあたり、横浜開港資料館と富山県立山博物館より貴重な文献の紹介をいただいた。記して感謝の意を表したい。

文献

福沢都茂子, 1978. 英国公使館書記アーネスト・サトウの立山登山日記. 富山県史だより, 3:24-31.
萩原延寿, 2007. 旅立ち 遠い崖1アーネスト・サトウ日記抄. pp.1-360. 朝日新聞出版, 東京.
萩原延寿, 2008. 西南戦争 遠い崖13アーネスト・サトウ日記抄. pp.370-381. 朝日新聞出版, 東京.
橋本友美, 1994. 舟倉用水. 富山大百科事典編集事務局編, 「富山大百科事典」p.788-789. 北日本新聞社, 富山.
池原昭治, 1993. 日本の民話300. pp.243-244. 木馬書館, 東京.
松村任三編, 1905. 帝国植物名鑑下巻頭花部前編.

pp1-338. 丸善, 東京.

松村任三編, 1912. 帝国植物名鑑下巻頭花部後編.

pp1-790. 丸善, 東京.

長野県教育委員会編, 1979. 信州の民俗. p.56. 第一法規出版, 東京.

長野県植物誌編纂委員会, 1997. 長野県植物誌. pp.1-1735. 信濃毎日新聞社. 長野.

長沢武, 1972. 北アルプス北部の山今昔. in 大町山岳博物館編, 「北アルプス博物誌Ⅰ登山・民俗」p.295.

中村武久・高橋秀男・丸山晃, 1959. 針ノ木岳における高等植物フロラ(第一報), 大町山岳博物館編「針ノ木岳」pp.150-172.

小原修三, 1992. 八尾の方言. p.36. 私家版, 八尾町.

大井冷光, 1908. 立山案内. pp81. 清明堂, 富山.

大町市史編纂委員会, 1984a. 大町市史1巻自然環境. pp.582-584. 大町市.

大町市史編纂委員会, 1984b. 大町市史5巻民俗・観光資料. pp.206-216. 大町市.

大町市史編纂委員会, 1984c. 大町市史第5巻民俗・観光. 973. 大町市.

大町市史編纂委員会, 1985a. 大町市史第2巻原始・古代・中世. p.642. 大町市.

大町市史編纂委員会, 1985b. 大町市史4巻近代・現代. pp.645-654. 大町市.

大町市史編纂委員会, 1986. 大町市史第3巻近世. pp.710-711. 大町市.

大山の歴史編集委員会, 1990. 大山の歴史. pp.544-552. 大山町.

佐伯喜代男, 2001. 立山信仰曼荼羅の里史跡を訪ねる. p19. 立山風土記の丘, 立山町.

信濃の民話編集委員会, 1958. 信濃の民話. pp.1-296. 未来社, 東京.

庄田元男, 1992. 日本旅行日記1. pp.64-133. 平凡社, 東京.

高木知恵編, 2009. 最古の富山県方言集. pp.1-352. 桂書房, 富山.

高瀬重雄, 1981. 立山信仰の歴史と文化. pp.353-358. 名著出版, 東京.

立山町, 1977. 立山町史上巻. pp.744. 立山町.

立山町, 1984. 立山町史下巻. pp.570-575. 立山町.

富山県史編纂委員会, 1978. 富山県史史料編6近代上.

pp.1427-1434. 富山県, 富山.

宇奈月町教育委員会, 1987. 宇奈月の方言. p.135. 宇奈月町教育委員会, 宇奈月町.

八坂書房編, 2001. 日本植物方言集成. pp.1-946. 八坂書房, 東京.

- 横浜開港資料館, 2001. 図説アーネスト・サトウ. pp. 1-123. 有隣堂, 横浜.
- 米倉浩司・梶田忠, 2003. 「BG Plants 和名 - 学名インデックス」(YList), http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html (2014年3月19日).
- 吉田光邦, 1968. お雇い外国人 2. pp. 159-181. 鹿島研究所出版会, 東京.
- 吉沢庄作, 1923. 立山に関する調査, 富山県編『史跡名勝天然記念物調査報告第 5 号』, p. 15. 富山県.
- 吉沢庄作, 1927. 立山案内, 富山県編『史跡名勝天然記念物調査報告第 9 号』, pp. 47-49. 富山県.
- 四谷龍胤, 1980. ある登山家の半生. pp. 139-151. 岳書房, 東京.